

着物塾 講習会

整体と武術（新陰流）を学んで20年、日常着に着物を着て10年。豆屋・楽天堂の高柳無々々が、着物 life のコツを初めての方にも分かりやすくお伝えします。

日程 参加者のご都合に合わせて設定します。ご希望の日程・曜日・時間をご連絡下さい。

時間 10:00-12:30 or 13:30-16:00 **会場** 楽天堂（京都市上京区） **定員** 3名（1名から開講）

会費 無料 **講師** 高柳無々々（豆屋楽天堂・堂守 からだとことばを育む会主宰）

申込 受講希望日の1週間前までに、[からだとことばを育む会](#) HPの受講申込フォームでお申し込み下さい。



【内容】

基本 禪（ふんどし）→襦袢（じゅばん）→着物（長着）→羽織（はおり）の着付けを学びます。帯は「貝の口」で締めます。

発展 袴（はかま）のはき方／たすきがけ／歩法／小手先を避ける

その他 着物の入手法／手入れの仕方／履き物について／春夏秋冬にどんな着物を着たらよいか

※着物や帯（兵児帯ではなく角帯）などをお持ちの方はご持参下さい。無い方にはお貸しします。

※着付けの際は、上は長袖Tシャツ・下はスパッツ or 股引をご着用下さい。

※動きやすい服装＋できれば足袋 or 5本指ソックスでお越し下さい(着替え可)。

★参加者に、伊勢神宮の禊ぎ用禪をプレゼント！

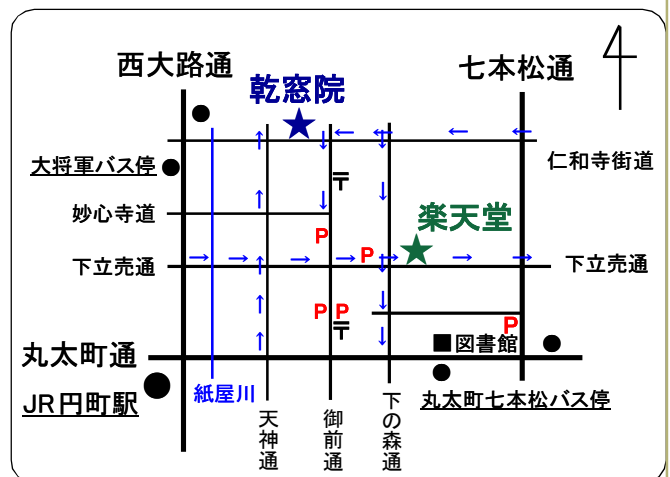
▽申込

www.rakutendo.com/karakotokai

※【講習会】（初めての方向けの整体入門篇 1-day レッスン 随時開講 無料）や定例の【稽古会】も行っていきます。

【アクセス】

- ★楽天堂 ①JR山陰線「円町」駅（快速停車）下車徒歩12分
- ②市バス「丸太町七本松」バス停から徒歩4-6分



【高柳無々々】（たかやなぎ・むむむ）

1955年神奈川県横須賀市生まれ 高校教師@横須賀、ぷーたろ@熊野、洋服店経営@山口をへて、2003年から京都で豆屋・楽天堂を営む。1999-2010年、整体協会・身体教育研究所で整体を学ぶ。武術（新陰流）も少々。2011年春、からだとことばを育む会の活動を始める。家族は妻と一男一女。糠漬け・豆乳ヨーグルト・納豆・もやし・めだか・みみずのいきもの係。



楽天堂・豆料理クラブは 豆と豆料理の普及を通して分かち合う文化の創造に努めます



www.rakutendo.com
豆料理クラブ

私は自宅兼店で豆屋をやっていることもあって、十年ほど前から日々着物を着て暮らしています。洋服からすぐに切り替えられたわけではありません。2003年に京都に越してきた際、夏の暑さに音（ね）を上げて作務衣（さむえ）おじさんになり、それから二、三年して腰のあたりが締まらないのでパンツをやめてふんどしにし、また二、三年後に着物を着てみようかという気持ちになって今に至っています。家族とトレッキングやキャンプに行く時はアウトドア用のウエアを着用したりとT. P. O. に応じて洋服も着ますが、そんな時でも家に帰ると無性に和服に着替えたくになります。日曜日の夜にテレビで放送している漫画『サザエさん』に出てくる波平（なみへい）お父さん状態です。

それまで私にとって着物とは、趣味人かお金のある人が着るものというイメージでした。私は1955年（昭和30年）生まれですが、言うまでもなくパンツにシャツの世代です。子どもの頃、町内会の盆踊りで浴衣（ゆかた）を着せてもらったくらいです。ただ私が小学校中学年くらいまでは、母は着物の上に割烹着（かっぽうぎ）で暮らし、自分で洗い張りもしていたおぼろげな記憶があります。そんな私が“な～んちゃって着物人”になったのには、整体（内観法）の稽古を二十年ほど続けてきたことが大きかったと思います。いつの間にか、からだの感覚が変わったとしか言えません。何しろ、稽古を始めた当初から着物＋野袴（のばかま）を着用していましたが、稽古が終わったら普段着の洋服に着替える——その事に対して何の疑問も抱かずにいた、それどころか、私は洋服を売る仕事をしていました！ のですから。稽古が日常と“断絶”していたのです。

着物を着始めるようになって、痛切に感じたことがあります。それは生まれた時から——死ぬまで——着物を着ていた人たち（江戸時代人まで）と自分（のような近代日本人）とでは、からだの感覚が決定的に違うのではないかと、ということです。整体（内観法）では、からだの感覚こそ言葉や衣食住のありようという〈文化〉を産み育ててきた母胎だという位置づけをしています。その伝でいけば、「“はら”をくくる」「“こし”が抜ける」という“からだ言葉”を——身体感覚を伴わずに——ただ喩え（記号）としてしか使えない私たち現代日本人は、別の文化に生きているのではないだろうか、と。かるがるしく「伝統の継承」などと口には出すまい、と思いました。

それでは日常着として着物を着ることにどんな意味があるのか？——趣味でもステータスのシンボルでもましてや何らかの義務ではなく、着ることに……。今の私が言えるのは、次のようなことです。まず、何よりも心地よい点が第一。次に付け加えるならば、日々和服を着ることによってからだの感覚を取り戻す、その過程で、日本文化の理（ことわり）のようなものを——書物などの知識ではなく——身体感覚として体験し、知る楽しさ、とでも言いましょか。いわく、着物はなぜ（洋服と違って）首まわりを開け手首・足首も締めつけないのか、なぜ直線裁（だ）ちなのか、なぜ左前身頃（まえみごろ）を上重ねるのに「右前（みぎまえ）」と言うのか、そもそもなぜ「きる」と言うのか etc.。

もちろんそれは私の“感覚”ですから、何の根拠もありません。間違っているかもしれません。また、近代以前の日本文化（社会）を理想郷（パラダイス）のように言うつもりもありません。ただ、着物を日々着ることによって得られるもの、一言でいえば和（なごみ・やわらぎ）の感覚が、今の日本文化／日本社会のグロテスクなまでに非人間的・反生命的なありようを変えていく可能性を秘めているのではないかと密かに信じているのです。祈念と言ってもいいかもしれません。私が女房と営んでいる豆屋・楽天堂のキャッチフレーズを使えば、〈分かち合う文化〉の創造です。

この小さな着物教室に参加された方が、着物を着物たらしめている感覚を体験することを通して、実践への一歩を踏み出してもらえたら——たとえ週に一度でも、仕事が休みの日に家で和服で過ごすようになるとか——私としても望外の喜びです。